

令和7年度 第1回あきる野市こども計画策定・推進委員会専門部会

青少年に関する部会での意見報告

- 1 開催日時：令和7年5月15日（木） 午後6時30分～午後8時20分
- 2 開催場所：あきる野市役所本庁舎 5階503会議室
- 3 出席者

役職	氏名	所属等
部会長	元治 恵子	明星大学 人文学部人間社会学科
部員	西村 翔馬	市民
部員	櫻沢 加奈江	青少年委員
部員	鶴水 佐緒理	中学校区健全育成推進会議連絡会
部員	松崎 真理子	市内都立高等学校
部員	多田 春美	市内公立小・中学校長会
部員	海老沢 治美	民生・児童委員協議会

4 議事

(1) ヤングケアラー（若者ケアラー）について

【議題①】

- ヤングケアラーについて、皆さんが身近で見聞きすることがあればお聞かせください。

【議題に対して挙がった意見】

- ・授業に出席しない大学生に個別でヒアリングを行ったところ、幼いきょうだいの世話や親の看病をしていることが発覚したケースがある。
- ・親の体調不良に起因して、子どもが友達との約束をキャンセルしてしまったり、学校内での素行が悪くなるケースがあった。水面下で親の体調不良が子どもの生活に影響を与えている。
- ・不登校の生徒の背景を探ると、両親が共働きなどの要因によって幼いきょうだいの世話をするために休んでいるケースがある。家庭の事情は把握しにくいが、不登校という形で顕在化することがある。
- ・大学卒業後に、母親に術後のリハビリが必要となり、また父親が家事をしないことで、家事と看病に追われている若者が身近にいる。経済的に困窮しているわけではないようだが、家庭内でその若者に負担が集中しており、就職に影響を与えている。
- ・ヤングケアラーやDVなどの家庭内の問題は、突如発生するものではなく、慢性的に家庭内に存在していたものが、当事者が声を上げることによって顕在化するものである。
- ・親と子どもで家の捉え方にギャップが存在するケースがある。あるひとり親家庭で、母親からは「子どもが家事を手伝ってくれる」と聞いた一方で、子どもからは、「母親が一人で働いているため、家事はすべて自分がやらされている」と聞いたケースがあった。親子の認識のズレに、ケアラーの線引きの難しさを感じる。
- ・幼いきょうだいの世話をしなければならない、またはアルバイトをすることで家計を支えなければならない等の要因で、部活動に参加できず、友人と遊ぶこともできない高校生が多数いる。そのような状況を当たり前のことと思い込んでいる様子も見られる。

- ・公立高校において、スクールカウンセラーによる全員面談の機会を設けている。その場で家庭の事情について打ち明けない・言いたくないと思っている場合は把握が難しい。打ち明けてきた子に対しても、学校が直接的に何かすることは難しく、育児代行や家事代行を請け負う支援の受け皿が整備されていない。
- ・ヤングケアラー当事者が自発的に声を上げないと発見するのは難しい。

【議題②】

- ヤングケアラー状態にある若者を把握し、支援につなげるためにはどのような取組が必要だと思いますか。

【議題に対して挙がった意見】

- ・中高生は家庭内の状況を他人に話すのを嫌がる時期でもあるため、相談した場合のメリット（どのような支援が受けられるか、どれほど自分が楽になるか）を学校等で周知し明確にする必要がある。
- ・ヤングケアラー状態にある生活を当たり前だと捉えているこどもは、その生活にメリットを感じている場合もあるため、その場合には他の生活もあることを知つてもらい、こども自身がよりよい環境・生活を求める気持ちにならないと、ヤングケアラーから脱することは難しいと考える。
- ・行政による支援サービスが用意されていても、利用するにあたって制約や利用料の発生によって、登録するだけで留まってしまった経験がある。また、実際に支援を求める一步を踏み出せないこともある。
- ・今回的小5・中2調査において、“ヤングケアラーの可能性がある” こどものうちの8割が、家で担う役割のせいでできていないことは「特にない」と答えており、あまり困っている感じは見受けられない。しかし、実際にヤングケアラー状態にあるこどもは、不登校が長期化しており、食事もおろそかで虐待状態にあることもある。学校で定期的に開催しているスクールカウンセラ一面談などを通じて、早期発見に努め、支援につなげる必要がある。また、ヤングケアラーの兆候に気づけるように教員の資質向上も必要である。
- ・今回の調査においても、回答していない（できなかった）人の中に、深刻な状況に置かれているこども・若者がいる可能性がある。取りこぼさないためにも、日ごろから生徒と親密な関係にある教員に注意深く見守ってもらうしかないのだろうか。
- ・経済的な支援をする際に、現金給付を実施すると保護者に取り上げられたり、本来とは別の用途で使われたりする可能性があるため、商品券や、サービスを利用した際のキャッシュバックのような形での支援も検討すべき。

(2) 地域活動について

【議題①】

●近隣の地域活動について、お気づきのことなどがあればお聞かせください。

【議題に対して挙がった意見】

- ・十数年前と比較して、地域で大人とこどもが関わる機会が減ったと感じる。知ってる大人がいるから、友達が行くからなどの動機があればイベントや地域のお祭りは参加しやすいが、知り合いが誰もいないと参加しづらい。
- ・ラジオ体操や地域清掃を開催しても、朝起きられないこどもや、部活動によって参加しない（できない）こどもがいる。
- ・地域のお祭りなどが特定の小学校区のこどもを対象としている場合があり、近隣に住む別の学校区のこどもが参加しにくい状況がある。
- ・地域活動への関わりでPTAが重要な役割を担っている一方で、PTA活動に負担を感じる保護者が増えており、地域との結びつきが弱まる懸念がある。
- ・教員の働き方改革によって、教員が地域のイベントに参加しづらくなり、生徒の参加を促す機会が減っている。
- ・地域のイベントの開催に関してのお便りが、直接保護者にLINEやメールが届くため、家庭の教育方針や保護者の好き嫌いで、こどもへの情報がシャットアウトされ、参加につながっていない可能性がある。
- ・イベントを開催しても地理的にこどもひとりで行くのは困難な場合もあり、保護者の目線として心配である。親が送り迎えをするとても、親の好みで一緒に連れていく友だちを決めてしまうため、皆が行けるわけではない。
- ・トラブルを避けるために、学校側から「ゲームセンターや映画館にこどもだけで行ってはいけない」と禁止事項を設けられているがために、地域活動への参加が難しくなっている側面もあるのではないか。
- ・20代後半になると、あきる野市に移住してくる人もいると推察される。移住者が市報等を読むことは考えにくく、地域の情報を得にくくなっているのではないか。

【議題②】

- 若者の地域活動参加を促すことや、孤独感の解消につながる取り組みについて、ご意見をお聞かせください。

【議題に対して挙がった意見】

- ・イベントや活動の場の認知度を上げることが重要である。
- ・若い世代はネットやSNSを一番見る世代だとは思うが、あきる野市のイベントを周知して、どれだけの市民の目に入るかを考えると可能性は低いように思う。駅のポスターや市の広報に載せても、スマホを見ながら歩いている人の目には届かない。SNSでも最近は、自身の関心の高いものが表示される仕様になつたため、行政の告知も元々関心がある人のタイムラインにしか表示されないのでないか。
- ・地域活動の主催団体が高齢化・縮小化していく、こども・若者にとって魅力的な企画や景品ではなくなっている。大人が企画するのではなく、若者自身が企画・運営していく地域活動であれば、同世代が関心をもって参加する可能性がある。
- ・地域活動を盛り上げていく中心となりえる人物を見つけ、活動の輪を広げていくのはどうか。
- ・あきる野市で自主的に地域活動をしている人が一堂に会し、活動内容について展示・紹介するイベントを開催するのはどうか。
- ・市内に複数ある市民団体が共同でイベントを開催することで、参加者のさらなる交流を図り、地域活動を広げていくことが必要である。
- ・スポーツや読書、音楽など、若者の興味・関心に合わせて、多様な居場所を用意することで、それぞれの若者のニーズに適した環境を用意することが重要ではないか。

【議題③】

●若者が気軽に行くことができる居場所とは、どのような場所だと思いますか。

【議題に対して挙がった意見】

- ・スポーツのパブリックビューイングのように、同じ趣味や応援する目的があると、1人でも足が向きやすく、知らない人同士でも交流ができ、居場所の意味でも関係を築けると考える。
- ・15～29歳の地域活動不参加の理由で「地域でどのような活動が行われているか知らない」が一番多い。高齢者の方々が毎朝ラジオ体操に集まっているのを見ると、それぞれの地域で、徒歩や自転車で行ける所に、定期的に若者が集まれる場を設けて周知できれば、「行ってみようかな」という気持ちになるのではないか。
- ・先日行ったお店が、レストランに書店が併設されている造りになっていた。そこでは「若者のお腹と知識を満たしたい」「人が集まる場所を作りたい」という思いで運営されており、300円でチケットを1枚寄付することができ、立ち寄った若者がそのチケットを飲食代の一部に使える仕組みになっていた。また、どんな人でも入店できるように、バリアフリーの観点から1階にお店を構えている。このような試みも参考になるのではないか。
- ・若者世代が求めている居場所は、若者世代がニーズを把握していると考えられる。若者たち自身で企画・運営し、意見を出し合うことでよりニーズに適した居場所が整備される可能性がある。
- ・放課後、家や教室に居場所がない生徒が集まる「校内カフェ」に携わっている。卒業生による運営のもと、各々がやりたいことをして過ごしており、利用する生徒のニーズを取り入れたプランを卒業生が検討し、輪が広がってきていている。特定の目的がなくても集まれる場所であれば、気軽に行くことができると考える。
- ・大学内にも、立ち寄って何かやりたいことをしていい部屋は用意されている。そのような「居てもいい場所」の周知が重要である。

(3) 将来への不安について

【議題①】

- 身近にいるこども・若者は、ライフステージ毎にどのような不安や悩みを抱えていると思いますか。(学生、社会人、結婚など)

【議題に対して挙がった意見】

○学生

- ・進学や就職、「自分が何をしたいのかわからない」といった漠然とした将来に対する悩み。

○社会人

- ・収入や生活費、結婚、子育て、子どもの教育費用。

○世代問わず共通

- ・SNSやネットで過剰に情報に触れ、情報過多になることで、本来は感じなくてよい不安まで感じている傾向がある。
- ・戦争や不況など、社会情勢に関する不安。
- ・新型コロナウィルスを経験したことによる、健康に関する不安。
- ・ネット上の偏った情報を目にすることで、結婚や子育てについてネガティブなイメージを持っている。

○その他

- ・現代の子は、小さい頃から職業体験などをさせられ、将来の夢や展望を持つことを求められすぎているような気がしている。
- ・15歳から29歳は何に対しても不安を感じやすい時期であると思う。この世代は新型コロナウィルスも経験したため、不安を抱えていて当たり前だと思う。年齢を重ね、自己理解が深まっていくに伴って不安が解消されていくのではないか。

【議題②】

- 上記の議題で挙がった不安や悩みを解消するために、どのような取組が必要だと 思いますか。（進学、就職、収入、生活費、自分の健康、結婚など）

【議題に対して挙がった意見】

- ・経済的に充実し、自立した生活を送ることができていれば、将来的な不安や悩みは少し解消される可能性がある。
- ・進学や就職に漠然とした不安を抱えるのは、子どもの経験が不足しているためだと考える。子ども自身の「これをやってみたい」「こんなことが自分は好きかもしれない」といった自発的な意思を引き出すために、家庭の教育方針や経済状況など、置かれている状況にかかわらず、参加・体験できるイベントを整備する必要がある。
- ・体験・経験がないことには不安が伴うものである。家庭の経済状況によって、子どもの体験に格差が生じているため、すべての子どもが同様の体験ができるようになるとよいと思う。
- ・子育てを経験した世代から子ども・若者世代へ向けて、「大人になることは怖くない」「家庭を持って子育てすることはそんなに悪くないものだ」とポジティブな側面を伝える。
- ・「失敗しても大丈夫」というメッセージを伝え、若者が安心して挑戦できる社会的な雰囲気を醸成する。
- ・若者の声に耳を傾け、若者が必要としている支援策を打ち出したり、本人へのヒアリングによって適性のある分野を汲み取り、導いてくれる受け皿を整備する。
- ・親や教員とは異なる立場の大人に、気軽に相談できる環境を整備する。